

# 源氏物語

## 神卷

与謝野晶子訳





源氏物語

榊

紫式部

與謝野晶子訳

五十鈴川神のさかひへのがれきぬおも

ひあがりしひとの身のはて　（晶子）

齋宮さいぐうの伊勢へ下向げこうされる日が近づけば近づくほど御息所みやすどころは心細くなるのであった。左大臣家の源氏の夫人がなくなつたあとでは、世間も今度は源氏と御息所が公然と夫婦になるものと噂うわさしていたことである

し、六条の邸の人々もそうした喜びを予期して興奮していたものであるが、現われてきたことは全然反対で、以前にまさって源氏は冷淡な態度を取り出したのである。これだけの反感を源氏に持たれるようなことが夫人の病中にあったことも、もはや疑う余地もないことであると御息所の心のうちでは思っていた。苦痛を忍んで御息所は伊勢行きを断行することにした。斎宮に母君がついて行くような例はあまりないことでもあったが、年少でおありになるということに託して、御息所はきれいに恋から離れてしまおうとしているのであるが、源氏はさすがに冷静ではいられなかった。いよいよ御息所に行ってしまったわれることは残念で、手紙だけは愛をこめてたびたび送っていた。情人として逢うようなことは思いもよらないようにもう今の御息所は思っていない

た。自分に逢っても恨めしく思った記憶のまだ消えない源氏は冷静にも別れうるであろうが、その人をより多く愛している弱味のある自分は心を乱さないではいられないであろう、逢うことはこの上にいつそう苦痛を加えるだけであると思つて、御息所はしいて冷ややかになつてゐるのである。野の宮から六条の邸やしきへそつと歸つて行つてゐることもあるのであるが、源氏はそれを知らなかった。野の宮といえは情人として男の通つてよい場所でもないから、二人のためには相見る時のない月日がたつた。院が御大病というのでなしに、時々発作的に悪くおなりになるようなことがあつたりして、源氏はいよいよ心の余裕の少ない身になつていたが、恨んでゐるままに終わることは女のためにかわいそうであつたし、人が聞いて肯定しないことでもあらうからと

思つて、源氏は御息所を野の宮へ訪問することにした。

九月七日であつたから、もう齋宮の出発の日は迫つていたのである。女のほうも今はあわただしくてそうしていられないと言つて来ていたが、たびたび手紙が行くので、最後の会見をすることなどはどうだろうと躊躇ちゅうちよしながらも、物越しで逢うだけにとめておけばいいであろうと決めて、心のうちでは昔の恋人の来訪を待つていた。

町を離れて広い野に出た時から、源氏は身にしむものを覚えた。もう秋草の花は皆衰えてしまつて、かれがれに鳴く虫の声と松風の音が混じり合い、その中をよく耳を澄まさないでは聞かれないほどの楽音が野の宮のほうから流れて来るのであつた。艶えんな趣である。前駆をさせるのに睦むつまじい者を選んだ十幾人と隨身とをあまり目だたせないよう

にして伴った微行しのびの姿ではあるが、ことさらにきれいに装うて来た源氏がこの野に行くことを風流好きな供の青年はおもしろがつていた。源氏の心にも、なぜ今までに幾度もこの感じのよい野中の路みちを訪問に出なかったのであらうとくやしかった。

野の宮は簡単な小柴垣こしばがきを大垣にして連ねた質素な構えである。丸木の鳥居などはさすがに神々こうごうしくて、なんとなく神の奉仕者以外の者を恥ずかしく思わせた。神官らしい男たちがあちらこちらに何人かずついて、咳せきをしたり、立ち話をしたりしている様子なども、ほかの場所に見られぬ光景であった。篝火かがりを焚たいた番所がかすかに浮いて見えて、全体に人少なな湿っぽい空気の感ぜられる、こんな所に物思いのある人が幾月も暮らし続けていたのかと思うと、源氏は恋人がいたま

しくてならなかった。北の対の下が目だたない所に立って案内を申し入れると音楽の声はやんでしまつて、若い何人もの女の衣摺きぬずれらしい音が聞こえた。取り次ぎの女があとではまた変わつて出て来たりしても、自身で逢おうとしないらしいのを源氏は飽き足らず思つた。

「恋しい方を訪ねて参るたずようなことも感情にまかせてできた私の時代はもう過ぎてしまひまして、どんなに世間をはばかりて来ているかしれませんような私に、同情してくださいますなら、こんなよそよそしいお扱いはなさらないで、逢つてくださつてお話ししたくてならないことも聞いてくださいませんか」

とまじめに源氏が頼むと女房たちも、

「おつしやることのほうがごもつともでございます。お気の毒なふう



にいつまでもお立たせしておきましては済みません」

ととりなす。どうすればよいかと御息所は迷った。潔斎所<sup>けっさいじよ</sup>について

いる神官たちにどんな想像をされるかしれないことであるし、心弱く

面会を承諾することによって、またも源氏の輕蔑<sup>けいべつ</sup>を買うのではないか

と躊躇<sup>ちゆうちよ</sup>はされても、どこまでも冷淡にはできない感情に負けて、歎息<sup>たんそく</sup>

を洩<sup>も</sup>らしながら座敷の端のほうへ膝行<sup>いざつ</sup>てくる御息所の様子には艶<sup>えん</sup>な品

のよさがあつた。源氏は、

「お縁側だけは許していただけるでしょうか」

と言つて、上に上がつていた。長い時日を中にした会合に、無情で

なかつた言いわけを散文的に言うのもきまりが悪くて、櫛<sup>さかき</sup>の枝を少し

折つて手に持つていたのを、源氏は御簾<sup>みす</sup>の下から入れて、

「私の心の常磐ときわな色に自信を持って、恐れのある場所へもお訪ねたずして  
来たのですが、あなたは冷たくお扱いになる」

と言った。

神垣かみがきはしるしの杉すぎもなきものをいかにまがへて折れる榊ぞ

御息所はこう答えたのである。

少女おとめご子があたりと思へば榊葉の香かをなつかしみとめてこそ折れ

と源氏は言ったのであった。潔斎所の空氣に威圧されながらも御簾

の中へ上半身だけは入れて長押なげしに源氏はよりかかっているのである。御息所が完全に源氏のものであつて、しかも情熱の度は源氏よりも高かつた時代に、源氏は慢心していた形でこの人の真価を認めようとはしなかつた。またいやな事件も起こつて来た時から、自身の心ながらも恋を成るにまかせてあつた。それが昔のようにして語つてみると、にわかには大きな力が源氏をとらえて御息所のほうへ引き寄せるのを源氏は感ぜずにいられなかつた。自分はこの人が好きであつたのだという認識の上に立つてみると、二人の昔も恋しくなり、別れたのちの寂しさも痛切に考えられて、源氏は泣き出してしまったのである。女は感情をあくまでもおさえていようとしながらも、堪えられないように涙を流しているのを見るといよいよ源氏は心苦しくなつて、伊勢

行きを思いとどまらせようとするのに身を入れて話していた。もう月が落ちたのか、寂しい色に変わっている空をながめながら、自身の真実の認められないことで歎<sup>なげ</sup>く源氏を見ては、御息所の積もり積もった恨めしさも消えていくことであろうと見えた。ようやくあきらめができた今になって、また動揺することになってはならない危険な会見を避けていたのであるが、予感したとおりに御息所の心はかき乱されてしまった。

若い殿上役人が始終二、三人連れで来てはこの文学的な空気に浸っていくのを喜びにしているという、この構えの中のながめは源氏の目にも確かに艶<sup>えん</sup>なものに見えた。あるだけの恋の物思いを双方で味わったこの二人のかわした会話は写しにくい。ようやく白んできた空

がそこにあるということもわざとこしらえた背景のようである。

暁の別れはいつも露けきをこは世にしらぬ秋の空かな

と歌った源氏は、帰ろうとしてまた女の手をとらえてしばらく去りえないふうであつた。冷ややかに九月の風が吹いて、鳴きからした松虫の声の聞こえるのもこの恋人たちの寂しい別れの伴奏のようである。何でもない人にも身にしむ思いを与えるこうした晩秋の夜明けにいて、あまりに悲しみ過ぎたこの人たちはかえって実感をよい歌にすることができなかつたと見える。

おほかた  
大方の秋の別れも悲しきに鳴く音ねな添へそ野辺のべの松虫

みやすどころ

御息所の作である。この人を永久につなぐことのできた糸は、自分の過失で切れてしまったと悔やみながらも、明るくなつていくのを恐れて源氏は去った。そして二条の院へ着くまで絶えず涙がこぼれた。

女も冷静でありえなかった。別れたのちの物思いを抱いて弱々しく秋の朝に對していた。ほのかに月の光に見た源氏の姿をなお幻に御息所は見ていたのである。源氏の衣服から散ったにおい、そんなものは若い女房たちを忌垣いがきの中で狂気にまでするのではないかと思われるほど今朝けさもほめそやしていた。

「どんないい所へだって、あの大將さんをお見上げすることのできな

い国へは行く気がしませんわね」

こんなことを言う女房は皆涙ぐんでいた。この日源氏から来た手紙は情がことにこまやかに出ていて、御息所に旅を断念させるに足る力もあつたが、官庁への通知も済んだ今になって変更のできることもなかった。男はそれほど思っていないことでも恋の手紙には感情を誇張して書くものであるが、今の源氏の場合は、ただの恋人とは決して思っていなかった御息所が、愛の清算をしてしまったふうに遠国へ行くこうとするのであるから、残念にも思われ、気の毒であるとも反省しての煩悶はんもんのかなりひどい実感で書いた手紙であるから、女へそれが響いていったものに違いない。御息所の旅中の衣服から、女房たちのままで、そのほかの旅の用具もりっぱな物をそろえた餞別せんべつが源氏から贈ら

れて来ても、御息所はうれしいなどと思うだけの余裕も心になかった。噂うわさに歌われるような恋をして、最後には捨てられたということ、今度始まったことのように口惜くちおしく悲しくばかり思われるのであった。お若い斎宮は、いつのことともしれなかった出発の日の決まったことを喜んでおいでになった。世間では、母君がついて行くことが異例であると批難したり、ある者はまた御息所の強い母性愛に同情したりしていた。御息所が平凡な人であつたら、決してこうではなかったことと思われる。傑出した人の行動は目に立ちやすくて気の毒である。

十六日に桂川で斎宮の御禊みそぎの式があつた。常例以上はなやかにそれらの式も行なわれたのである。長奉送使ちようふうそうし、その他官庁から参列させる



高官も勢名のある人たちばかりを選んであつた。院が御後援者でいらせられるからである。出立の日に源氏から別離の情に堪えがたい心を書いた手紙が来た。ほかにまた斎いつきの宮のお前へといって、斎布ゆふにつけたものもあつた。

いかずちの神でさえ恋人の中を裂くものではないと言います。

八洲やしまもる国つ御神みかみもころあらば飽かぬ別れの中をことわれ

どう考えましても神慮がわかりませんから、私は満足できません。

と書かれてあつた。取り込んでいたが返事をした。宮のお歌を女別にょべつ当とうが代筆したものであつた。

国つ神空にことわる中ならばなほざりごとを先づ<sup>ま</sup>やたださん

源氏は最後に宮中である式を見たくも思ったが、捨てて行かれる男が見送りに出るというきまり悪さを思つて家にいた。源氏は齋宮の大人<sup>な</sup>びた返歌を微笑しながらがめていた。年齢以上によい貴女<sup>きじよ</sup>になつておられる気がすると思うと胸が鳴った。恋をすべきでない人に好奇心の動くのが源氏の習癖で、顔を見ようとすれば、よくそれもできた齋宮の幼少時代をそのままで終わったことが残念である。けれども運命はどうなつていくものか予知されないのが人生であるから、またよりよくその人を見ることが出来る日を自分は待っているかもしれないのであるとも源氏は思った。見識の高い、美しい貴婦人であると名高

い存在になつてゐる御息所の添つた齋宮の出発の列をながめようとして物見車ものみぐるまが多く出ている日であつた。齋宮は午後四時に宮中へおはいにこしになつた。宮の輿こしに同乗しながら御息所は、父の大臣が未来きさきの後に擬して東宮の後宮に備えた自分を、どんなにはなやかに取り扱つたことであつたか、不幸な運命のはてに、後の輿でない輿へわずかに陪乗して自分は宮廷を見るのであると思ふと感慨が無量であつた。十六で皇太子の妃ひになつて、二十で寡婦になり、三十で今日また内裏だいりへはいつたのである。

そのかみを今日けふはかけじと思へども心のうちに物ぞ悲しき

御息所の歌である。齋宮は十四でおありになった。きれいな方である上に、錦繡きんしゅうに包まれておいでになったから、この世界の女人にょにんとも見えないほどお美しかった。齋王の美に御心みこころを打たれながら、別れの御櫛しを髪に挿さしてお与えになる時、帝みかどは悲しみに堪えがたくおなりになったふうで悄然しやうぜんとしておしまいになった。式の終わるのを八省院はつしょういんの前に待っている齋宮の女房たちの乗った車から見える袖そでの色の美しさも今度は特に目を引いた。若い殿上役人が寄って行って、個人個人の別れを惜しんでいた。暗くなってから行列は動いて、二条から洞院とういんのおおし大路を折れる所に二条の院はあったから、源氏は身にしむ思いをしながら、櫛さかきに歌を挿さして送った。

ふりすてて今日行くとも鈴鹿川<sup>すずか</sup>八十瀬<sup>やそせ</sup>の波に袖は濡れじや

その時はもう暗くもあつたし、あわただしくもあつたので、翌日<sup>おう</sup>逢坂山<sup>さかやま</sup>の向こうから御息所の返事は来たのである。

鈴鹿川八十瀬の波に濡れ濡れず伊勢までたれか思ひおこせん

簡単に書かれてあるが、貴人らしさのある巧妙な字であつた。優しさ或少し加えたら最上の字になるであろうと源氏は思った。霧が濃くかかつていて、身にしむ秋の夜明けの空をながめて、源氏は、

行くかたをながめもやらんこの秋は逢坂山を霧な隔てそ

こんな歌を口ずさんでいた。西の対へも行かずに終日物思いをして源氏は暮らした。旅人になった御息所はまして堪えがたい悲しみを味わっていたことであろう。

院の御病気は十月にはいつてから御重体になった。この君をお惜しみしていないものはない。帝も御心配のあまりに行幸あそばされた。みかど御衰弱あそばされた院は東宮のことを返す返す帝へお頼みになった。次いで源氏に及んだ。

「私が生きていた時と同じように、大事も小事も彼を御相談相手になさい。年は若くても国家の政治をとるのに十分資格が備わっていると

私は認める。一国を支配する骨相を持っている人です。だから私は彼がその点で逆に誤解を受けることがあってはならないとも思つて、親王にしないで人臣の列に入れておいた。将来大臣として国務を任せようとしたのです。亡<sup>な</sup>くなつたあとでも私のこの言葉を尊重してください」

前の帝<sup>さきみかど</sup>、今の君主の御父として御希望を述べられた御遺言も多かつたが、女である筆者は気がひけて書き写すことができない。帝もこれが最後の御会見に院のお言いになることを悲しいふうで聞いておいでになつたが、御遺言を違<sup>たが</sup>えぬということを繰り返してお誓いになつた。風采<sup>ふうさい</sup>もごりつぱで、以前よりもいっそうお美しくお見えになる帝に院は御満足をお感じになり、頼もしさもお覚えになるのであつた。

高貴な御身でいらせられるのであるから、感情のままに父帝のもとにとどまっておいでになることはできない。その日のうちに還幸されたのであるから、お二方のお心は、お逢いになったあとに長く悲しみが残った。東宮も同時に行啓ぎようけいになるはずであつたがたいそうになることおぼしめを思召して別の日に院のお見舞いをあそばされた。御年齢以上に大人らしくなつておいでになる愛らしい御様子で、しばらくぶりでお逢いになる喜びが勝つて、今の場合も深くおわかりにならず、無邪氣にうれしそうにして院の前へおいでになつたのも哀れであつた。その横で中宮ちゅうぐうが泣いておいでになるのであるから、院のお心はさまざまにお悲しいのである。種々と御教訓をお残しになるのであるが、幼齡の東宮にこれがわかるかどうかと疑つておいでになる御心みこころからそこに寂しさ



と悲しさがかもされていった。源氏にも朝家ちようけの政治に携わる上に心得ていねばならぬことをお教えになり、東宮をお援たすけせよということを繰り返し繰り返し仰せられた。夜がふけてから東宮はお帰りになった。還啓に供奉ぐぶする公卿こうけいの多さは行幸にも劣らぬものだった。御秘蔵子の東宮のお帰りになったのちの院の御心は最もお悲しかった。皇太后もおおいでになるはずであったが、中宮がずっと院に添はうぎよっておいでになる点が御不満で、躊躇ちゆうちよあそばされたうちに院は崩御ほうぎよになった。御仁慈の深い君にお別れしてどんなに多数の人が悲しんだかしのれない。院みくらいの御位にお変わりあそばしただけで、政治はすべて思召しどおりになわれていたのであるから、今の帝はまだお若くて外戚の大臣が人格者でもなかったから、その人に政権を握られる日になれば、どんな世

の中が現出するであろうと官吏たちは悲観しているのである。院が最もお愛しになった中宮や源氏の君はまして悲しみの中におぼれておいでになった。崩御後の御仏事なども多くの御遺子たちの中で源氏は目だって誠意のある弔い方をした。それが道理ではあるが源氏の孝心に同情する人が多かった。喪服姿の源氏がまた限りもなく清く見えた。

去年今年と続いて不幸にあっていることについても源氏の心は厭世的えんせいに傾いて、この機会に僧になろうかとも思うのであったが、いろいろな絆ほどしを持っている源氏にそれは実現のできる事ではなかった。

四十九日までは女御にようごや更衣こういたちが皆院の御所にこもっていたが、その日が過ぎると散り散りに別な実家へ帰って行かねばならなかった。これは十月二十日のことである。この時節の寂しい空の色を見てはだ

れも世がこれで終わっていくのではないかと心細くなるころである。中宮は最も悲しんでおいでになる。皇太后の性格をよく知っておいになって、その方の意志で動く当代において、今後はどんなつらい取り扱いを受けねばならぬかというお心細さよりも、またない院の御愛情に包まれてお過ごしになった過去をお忍びになる悲しみのほうが大きかった。しかも永久に院の御所で人々とお暮らしになることはできずに、皆帰って行かねばならぬことも宮のお心を寂しくしていた。中宮は三条の宮へお帰りになるのである。お迎えに兄君の兵部卿ひょうぶきやうの宮がおいでになった。はげしい風の中に雪も混じって散る日である。すでに古御所ふるごしよになろうとする人少なさが感ぜられて静かな時に、源氏の大將が中宮の御殿へ来て院の御在世中の話を宮としていた。前の庭の五

葉が雪にしおれて下葉の枯れたのを見て、

蔭<sup>かげ</sup>ひろみ頼みし松や枯れにけん下葉散り行く年の暮<sup>くれ</sup>かな

宮がこうお歌いになった時、それが傑作でもないが、迫った実感は源氏を泣かせてしまった。すっかり凍ってしまった池をながめながら源氏は、

さえわたる池の鏡のさやけさに見なれし影を見ぬぞ悲しき

と言った。これも思ったままを三十一字にしたもので、源氏の作と

しては幼稚である。王命婦おうみょうふ、

年暮れて岩井の水も氷とぢ見し人影のあせも行くかな

そのほかの女房の作は省略する。中宮の供奉ぐぶを多数の高官がしたことなどは院の御在世時代と少しも変わっていなかったが、宮のお心持ちは寂しくて、お帰りになった御実家がかえって他家であるように思召されることによつても、近年はお許しがなくて御実家住まいがほとんどなかったことがおしのばれになった。

年が変わつても諒闇りょうあんの春は寂しかった。源氏はことさら寂しくて家に引きこもつて暮らした。一月の官吏の更任期などには、院の御代みよは

いうまでもないがその後もなお同じように二条の院の門は訪客の馬と車でうずまったのだったのに、今年は目に見えてそうした来訪者の数が少なくなった。宿直とのいをしに来る人たちの夜具類を入れた袋もあまり見かけなくなった。親しい家司けいしたちだけが暢気のんきに事務を取っているのを見ても、主人である源氏は、自家の勢力の消長と人々の信頼が比例するものであることが思われておもしろくなかった。右大臣家の六の君は二月に尚侍ないしのかみになった。院の崩御によつて前尚侍さきのが尼になったからである。大臣家が全力をあげて後援していることであつたし、自身に備わった美貌びぼうも美質もあつて、後宮の中に抜け出た存在を示していた。皇太后は実家においでになることが多くて、稀まれに参内になる時は梅壺うめつぼの御殿を宿所に決めておいでになった。それで弘徽殿こうきでんが尚侍ぞうの曹

司しになつていた。隣の登花殿などは長く捨てられたままの形であつたが、二つが続けて使用されて今ははなやかな場所になつた。女房なども無数に侍していて、派手はでな後宮生活こうきゆうをしながらも、尚侍の人知れぬ心は源氏をばかり思つていた。源氏が忍んで手紙を送つて来ることも以前どおり絶えなかつた。人目につくことがあつたらと恐れながら、例の癖で、六の君が後宮へはいつた時から源氏の情炎がさらに盛んになつた。院がおいでになつたころは御遠慮があつたであろうが、積年の怨みを源氏に酬むくいるのはこれからであると烈はげしい氣質の太后は思つておいでになつた。源氏に対して何かの場合に意を得ないことを政府がする、それが次第に多くなつていくのを見て、源氏は予期してゐたことではあつても、過去に経験しなかつた不快さを始終味わうのに堪

えがたくなつて、人との交際もあまりしないのであつた。左大臣も不愉快であまり御所へも出なかつた。亡<sup>な</sup>くなつた令嬢へ東宮のお話があつたにもかかわらず源氏の妻にさせたことで太后は含んでおいでになつた。右大臣との仲は初めからよくなかつた上に、左大臣は前代にいくぶん専横的にも政治を切り盛りしたのであつたから、当帝の外戚として右大臣が得意になつてゐるのに対しては喜ばないのは道理である。源氏は昔の日に変わらずよく左大臣家を訪<sup>たず</sup>ねて行き故夫人の女房たちを愛護してやることを忘れなかつた。非常に若君を源氏の愛することにも大臣家の人たちは感激してゐて、そのためにまたいっそう小公子は大切がられた。過去の源氏の君は社会的に見てあまりに幸福過ぎた、見ていて目まぐるしい気がするほどであつたが、このごろは



通っていた恋人たちとも双方の事情から関係が絶えてしまったのも多かったし、それ以下の軽い関係の恋人たちの家を訪ねて行くようなことにも、もうきまりの悪さを感じる源氏であつたから、余裕ができてはじめてのどかな家庭の主人になつていた。あるじ兵部卿の宮の王女の幸福であることを言つてだれも祝つた。少納言なども心のうちでは、この結果を得たのは祖母の尼君が姫君のことを祈つた熱誠が仏に通じたのであろうと思つていた。父の親王も朗らかに二条の院に出入りしておいでになつた。夫人から生まれて大事がつておいでになる王女方にたいたした幸運もなく、ただ一人がすぐれた運命を負つた女と見える点で、継母にあたる夫人は嫉妬しつとを感じていた。紫夫人は小説にある継娘ままこの幸運のようなものを實際に得ていたのである。

加茂の齋院は父帝の喪のために引退されたのであつて、そのかわりに式部卿しきぶきやうの宮の朝顔の姫君が職をお継ぎになることになった。伊勢へ女王が齋宮になつて行かれたことはあつても、加茂の齋院はたいてい内親王の方がお勤めになるものであつたが、相当した女御腹にようごばらの宮様がおいでにならなかつたか、この卜定ぼくじやうがあつたのである。源氏は今もこの女王に恋を持っているのであるが、結婚も不可能な神聖な職にお決まりになつた事を残念に思つた。女房の中将は今もよく源氏の用を勤めたから、手紙などは始終やつてゐるのである。当代における自身の不遇などは何とも思わずに、源氏は恋を歎なげいていた、齋院ないうのかみと尚侍のために。帝は院の御遺言のとおりに源氏を愛しておいでになつたが、お若い上に、きわめてお気の弱い方でいらせられて、母后や祖父の大臣

の意志によつて行なわれることをどうあそばすこともおできにならなくて、朝政に御不満足が多かつたのである。昔よりもいつそう恋の自由のない境遇にいても尚侍は文ふみによつて絶えず恋をささやく源氏を  
持つていて幸福感がないでもなかつた。

宮中で行なわせられた五壇の御修法みずほうのために帝が御謹慎をしておいでになるころ、源氏は夢のように尚侍へ近づいた。昔の弘徽殿ほそどのの細殿の小室へ中納言の君が導いたのである。御修法のために御所へ出入りする人の多い時に、こうした会合が、自分の手で行なわれることを中納言の君は恐ろしく思った。朝夕に見て見飽かぬ源氏と稀まれに見るのを得た尚侍の喜びが想像される。女も今が青春の盛りの姿と見えた。貴き女よらしい端嚴さなどは欠けていたかもしれぬが、美しくて、艶えんで、

若々しくて男の心を十分に惹く力があつた。もうつい夜が明けていくのではないかと思われる頃、すぐ下の庭で、

「宿直をいたしております」

と高い声で近衛このえの下士が言った。中少将のだれかがこの辺の女房の局つぼねへ来て寝ているのを知って、意地悪な男が教えてわざわざ挨拶あいさつをさせによこしたに違いないと源氏は聞いていた。御所の庭の所々をこう言つてまわるのは感じのいいものであるがうるさくもあつた。また庭のあなたこなたで「寅一つ」とら（午前四時）と報じて歩いている。

心からかたがた袖そでを濡ぬらすかな明くと教ふる声につけても

尚侍のこう言う様子はいかにもはかなそうであつた。

歎なげきつつ我が世はかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞともなく

落ち着いておられなくて源氏は別れて出た。まだ朝に遠い暁月夜で、霧が一面に降っている中を簡単な狩衣姿かりぎぬで歩いて行く源氏は美しかった。この時に承香殿じようきようでんの女御にようごの兄である頭中将とうのちゆうしようが、藤壺ふじつぼの御殿から出て、月光の蔭かげになつてゐる立部たてじとみの前に立っていたのを、不幸にも源氏は知らずに来た。批難ひなんの声はその人たちの口から起こってくるであらうから。

源氏は尚侍とまた新しく作ることのできた関係によつても、隙すきを

まったくお見せにならない中宮を<sup>ちゅうぐう</sup>ごりっぱであると認めながらも、恋する心に恨めしくも悲しくも思うことが多かった。御所へ参内することも気の進まない源氏であつたが、そのために東宮にお目にかからないことを寂しく思っていた。東宮のためにはほかの後援者がなく、ただ源氏だけを中宮も力にしておいでになつたが、今になつても源氏は宮を御当惑させるようなことを時々した。院が最後まで秘密の片はしすらご存じなしにお崩れ<sup>かく</sup>になつたことでも、宮は恐ろしい罪であると感じておいでになつたのに、今さらまた悪名<sup>あくみょう</sup>の立つことになつては、自分はともかくも東宮のために必ず大きな不幸が起こるであろうと、宮は御心配になつて、源氏の恋を<sup>ぶつりき</sup>仏力で止めようと、ひそかに<sup>きとう</sup>祈祷までもさせてできる限りのことを尽くして源氏の情炎から身をかわして

おいでになるが、ある時思いがけなく源氏が御寢所に近づいた。慎重に計画されたことであつたから宮様には夢のようであつた。源氏が御心を動かそうとしたのは偽らぬ誠を盛った美しい言葉であつたが、宮はあくまでも冷静をお失いにならなかつた。ついにはお胸の痛みが起こつてきてお苦しみになつた。命婦とか弁とか秘密に与つてゐる女房が驚いていろいろな世話をする。源氏は宮が恨めしくてならない上に、この世が真暗になつた氣になつて呆然として朝になつてもそのまま御寢室にとどまつていた。御病氣を聞き伝えて御帳台のまわりを女房が頻繁に往来することにもなつて、源氏は無意識に塗籠（屋内の蔵）の中へ押し入れられてしまった。源氏の上着などをそつと持つて来た女房も怖しがつていた。宮は未来と現在を御悲観あそばしたあま

りに逆上<sup>のぼせ</sup>をお覚えになつて、翌朝になつてもおからだは平常のようになかつた。

兄君の兵部卿の宮とか中宮大夫などが参殿し、祈りの僧を迎えようなどと言われているのを源氏は苦しく聞いていたのである。日が暮れるころにやつと御病悩はおさまつたふうであつた。源氏が塗籠で一日を暮らしたとも中宮様はご存じでなかつた。命婦や弁なども御心配をさせまいために申さなかつたのである。宮は昼の御座へ出てすわつておいでになつた。御恢復<sup>かいふく</sup>になつたものらしいと言つて、兵部卿の宮もお歸りになり、お居間の人数が少なくなつた。平生からごく親しくお使いになる人は多くなかつたので、そうした人たちだけが、そここの几帳<sup>きちよう</sup>の後ろや襖子<sup>からかみ</sup>の蔭<sup>かげ</sup>などに侍していた。命婦などは、



「どう工夫くふうして大将さんをそつと出してお帰ししましょう。またそばへおいでになると今夜も御病氣におなりあそばすでしょうから、宮様がお気の毒ですよ」

などとささやいていた。源氏は塗籠の戸を初めから細目にあけてあつた所へ手をかけて、そつとあけてから、屏風びょうぶと壁の間を伝つて宮のお近くへ出て来た。ご存じのない宮のお横顔を蔭からよく見るのできる喜びに源氏は胸をおどらせ涙も流しているのである。

「まだ私は苦しい。死ぬのではないかしら」

とも言つて外のほうをながめておいでになる横顔が非常に艶えんである。これだけでも召し上がるようにと思つて、女房たちが持つて来たお菓子の台がある、そのほかにも箱の蓋ふたなどに感じよく調理された物

が積まれてあるが、宮はそれらにお気がないようなふうで、物思いの多い様子をして静かに一所をながめておいでになるのがお美しかった。髪の毛、頭の形、髪のかかりぎわなどの美しさは西の対の姫君とそっくりであった。よく似たことなどを近ごろは初めほど感ぜずにいた源氏は、今さらのように驚くべく酷似した二女性であると思つて、苦しい片恋のやり場所を自分は持っているのだという気が少しした。高雅な所も別人とは思えないのであるが、初恋の宮は思いなしか一段すぐれたものに見えた。華麗な氣の放たれることは昔にましたお姿であると思つた源氏は前後も忘却して、そつと静かに帳台へ伝つて行き、宮のお召し物の褌先を<sup>つま</sup>手で引いた。源氏の服の<sup>くんこう</sup>薫香の香がさつと立つて、宮は様子をお悟りになつた。驚きと恐れに宮は前へひれ伏し

ておしまいになったのである。せめて見返つてもいただけないのかと、源氏は飽き足らずも思い、恨めしくも思つて、お裾すそを手にとって引き寄せようとした。宮は上着を源氏の手にとめて、御自身は外のほうへお退のきになろうとしたが、宮のお髪ぐしはお召し物とともに男の手がおさえていた。宮は悲しくてお自身の薄倖はっこうであることをお思いになるのであつたが、非常にいたわしい御様子に見えた。源氏も今日の高い地位などは皆忘れて、魂も顛倒てんとうさせたふうに泣き泣き恨みを言うのであるが、宮は心の底からおくやしそうでお返辞もあそばさない。ただ、

「私はからだは今非常によくないのですから、こんな時でない機会がありましたら詳しくお話をしようと思います」

とお言いになっただけであるのに、源氏のほうでは苦しい思いを告げるのに千言万語を費やしていた。さすがに身に沁しんでお思われになることも混じっていたに違いない。以前になかったことではないが、  
またも罪を重ねることは堪えがたいことであると思召おぼしめす宮は、柔らか  
い、なつかしいふうは失わずに、しかも迫る源氏を強く避けておいで  
になる。ただこんなふうで今夜も明けていく。この上で力で勝つこと  
はなすに忍びない清い気高けだかさの備わった方であつたから、源氏は、  
「私はこれだけで満足します。せめて今夜ほどに接近するのをお許し  
ください、今後も時々は私の心を聞いてくださいますなら、私はそ  
れ以上の無礼をしようとは思いません」

こんなふうに言つて油断をおさせしようとした。今後の場合のため

に。

こうした深刻な関係でなくても、これに類したあぶない逢瀬おうせを作る恋人たちは別れが苦しいものであるから、まして源氏にここは離れたい。夜が明けてしまったので王命婦と弁とが源氏の退去をいろいろに言つて頼んだ。宮様は半ば死んだようになっておいでになるのである。

「恥知らずの男がまだ生きているかとお思われしたくありませんから、私はもうそのうち死ぬでしょう。そしたらまた死んだ魂がこの世に執着を持つことで罰せられるのでしよう」

恐ろしい気がするほど源氏は真剣になっていた。

「逢ふことの難かたきを今日に限らずばなほ幾世をか歎なげきつつ経ん

どうなつてもこうなつても私はあなたにつきまといつてい

よ」

宮は吐息といきをおつきになつて、

長き世の恨みを人に残してもかつは心をあだとしらなん

とお言いになつた。源氏の言葉をわざと軽く受けたようにしておい  
でになる御様子の優美さに源氏は心を惹ひかれながらも宮の御輕蔑けいべつを受  
けるのも苦しく、わがためにも自重しなければならぬことを思つて

歸った。

あれほど冷酷に扱われた自分はもうその方に顔もお見せしたくない。同情をお感じになるまでは沈黙をしているばかりであると源氏は思つて、それ以来宮へお手紙を書かないでいた。ずっともう御所へも東宮へも出ずに引きこもつていて、夜も昼も冷たいお心だとばかり恨みながらも、自分の今の態度を裏切るように恋しさがつのつた。魂もどこかへ行っているようで、病気にさえかかったらしく感ぜられた。心細くて人間的な生活を捨てないからますます悲しみが多いのである、自分などは僧房の人になるべきであると、こんな決心をしようとする時にいつも思われるのは若い夫人のことであつた。優しく自分だけを頼みにして生きている妻を捨てえようとは思われないのであつ

た。

宮のお心も非常に動揺したのである。源氏はその時きり引きこもつて手紙も送つて来ないことで命婦などは気の毒がつた。宮も東宮のためには源氏に好意を持たせておかねばならないのに、自分の態度から人生を悲観して僧になつてしまわれることになつてはならぬとさすがに思召すのであつた。そうといつてああしたことが始終あつては瑕きずを捜し出すことの好きな世間はどんな噂うわさを作るかが想像される。自分が尼になつて、皇太后に不快がられている后の位から退いてしまおうと、こうこのごろになつて宮はお思いになるようになった。院が自分のためにどれだけ重い御遺言をあそばされたかを考えると何ごとも当代にそれが実行されていないことが思われる。漢の初期の戚夫人せきりよが呂



后に苛こうまれさいなたようなことまではなくても、必ず世間の嘲笑ちようしょうを負わねばならぬ人に自分はなるに違いないと中宮は思いになるのである。これを転機にして尼の生活にはいるのがいちばんよいことであるとお考えになったが、東宮にお逢いしないまま姿を変えてしまうことはおかしいそんなことであるとお思いになって、目だたぬ形式で御所へおはいりになった。源氏はそんな時でなくても十二分に好意を表する慣ならわしであつたが、病氣に托たくして供奉ぐぶもしなかつた。贈り物その他は常に変わらないが、来ようとしなないことはよくよく悲観しておいでになるに違いないと、事情を知っている人たちは同情した。

東宮はしばらくの間に美しく御成長しておいでになった。ひさびさ母宮とお逢いになった喜びに夢中になって、甘えて御覧になったりも

するのが非常におかしいのである。この方から離れて信仰の生活にはいれるかどうかと御自身で疑問が起こる。しかも御所の中の空気は、時の推移に伴う人心の変化をいちじるしく見せて人生は無常であるとお教えないではおかなかった。太后の復讐心ふくしゅうしんに燃えておいでになることも面倒めんどうであつたし、宮中への出入りにも不快な感を与える官辺のことも堪えられぬほど苦しくて、自分が現在の位置にいることは、かえつて東宮を危うくするものでないかなどとも煩悶はんもんをあそばすのであつた。

「長くお目にかからないでいる間に、私の顔がすっかり変わってしまつたら、どうお思ひになりますか」

と中宮がお言いになると、じつと東宮はお顔を見つめてから、

「式部のようにですか。そんなことはありませんよ」

とお笑いになった。たよりない御幼稚さがおかしいそうで、

「いいえ。式部は年寄りですから醜いのですよ。そうではなくて、髪なんか式部よりも短くなつて、黒い着物などを着て、夜居<sup>よい</sup>のお坊様のように私はなろうと思うのですから、今度などよりもっと長くお目にかかれませんか」

宮がお泣きになると、東宮はまじめな顔におなりになつて、

「長く御所へいらつしやらないと、私はお逢いしたくてならなくなるのに」

とお言いになったあとで、涙がこぼれるのを、恥ずかしくお思いになつて顔をおそむけになった。お肩にゆらゆらとするお髪<sup>ぐし</sup>がきれい

で、お目つきの美しいことなど、御成長あそばすにしたがつてただただ源氏の顔が一つまたここにできたとより思われないのである。お齒が少し朽ちて黒ばんで見えるお口に笑みをお見せになる美しさは、女の顔にしてみたいほどである。こうまで源氏に似ておいでになることだけが玉の瑕きずである、中宮が思いになるのも、取り返しがたい罪で世間を恐れておいでになるからである。

源氏は中宮を恋しく思いながらも、どんなに御自身が冷酷であつたかを反省おさせする気で引きこもっていたが、こうしていればいるほど見苦しいほど恋しかつた。この気持ちを紛らそうとして、ついにて秋の花野もながめがてらに雲林院へ行つた。源氏の母君の桐壺きりつぼの御息所ごしよの兄君の律師りっしがいる寺へ行つて、経を読んだり、仏勤めもしようと

して、二、三日こもっているうちに身にしむことが多かつた。木立ちは紅葉もみじをし始めて、そして移ろうていく秋草の花の哀れな野をながめていては家も忘れるばかりであつた。学僧だけを選んで討論をさせて聞いたりした。場所が場所であるだけ人生の無常さばかりが思われたが、その中でなお源氏は恨めしい人に最も心を惹ひかれてゐる自分を發見した。朝に近い月光のもとで、僧たちが闕伽あかを仏に供える仕度したくをするのに、からからと音をさせながら、菊とか紅葉とかをその辺いっばいに折り散らしている。こんなことは、ちよつとしたことではあるが、僧にはこんな仕事があつて退屈を感じる間もなからうし、未来の世界に希望が持てるのだと思うとうらやましい、自分は自分一人を持てあましているのではないかなどと源氏は思っていた。律師が尊い声で

ねんぶつしゆじやせつしゆふしや  
「念仏衆生攝取不捨」ごんぎようと唱えて勤行をしているのがうらやましくて、

この世が自分に捨てられない理由はなかうと思ふのといっしよに  
紫の女王によわうが気がかりになったというのは、たいした道心でもないわけ  
である。幾日かを外で暮らすというようなことをこれまで経験しな  
かった源氏は恋妻に手紙を何度も書いて送った。

出家ができるかどうかと試みているのですが、寺の生活は寂しく  
て、心細さがつのるばかりです。もう少しいて法師たちから教えて  
もらうことがあるので滞留しますが、あなたはどうしていますか。  
などと檀紙に飾り気もなく書いてあるのが美しかった。

あさぢふの露の宿りに君を置きてよも四方の嵐あらしぞしづ心なき

という歌もある情のこもったものであつたから紫夫人も読んで泣いた。返事は白い式紙しきしに、

風吹けば先まづぞ乱るる色かはる浅茅あさぢが露にかかるささがに

とだけ書かれてあつた。

「字はますますよくなるようだ」

と独言ひとりごとを言つて、微笑しながらながめていた。始終手紙や歌を書き

合っている二人は、夫人の字がまったく源氏のに似たものになつていて、それよりも少し艶えんな女らしいところが添つていた。どの点からいっても自分は教育に成功したと源氏は思っているのである。齋院の

いられる加茂はここに近い所であつたから手紙を送つた。女房の中將あてのには、

物思いがつのつて、とうとう家を離れ、こんな所に宿泊していますことも、だれのためであるかとはだれもご存じのないことでしょう。

などと恨みが述べてあつた。当の齋院には、

かけまくも畏かしこけれどもそのかみの秋思ほゆる木綿ゆふだすき襦かな

昔を今にしたいと思ひましてもしかたのないことです。自分の意志で取り返しうるもののように。



となれなれしく書いた浅緑色の手紙を、櫛さかきに木綿ゆうをかけ神々こうごうしくした枝につけて送ったのである。中将の返事は、

同じような日ばかりの続きます退屈さからよく昔のことを思い出してみるのでございますが、それによってあなた様を聯想れんそうすることもしたくさんございます。しかしここでは何も現在へは続いて来ていないのでございます、別世界なのですから。

まだいろいろと書かれてあった。女王のは木綿ゆうの片はしに、

そのかみやいかがはありし木綿ゆふだすき襷たすき心にかけて忍ぶらんゆゑ

とだけ書いてあった。斎院のお字には細かな味わいはないが、高雅

で漢字のくずし方など以前よりもっと巧みになられたようである。ましてその人自身の美はどんなに成長していることであろうと、そんな想像をして胸をとどろかせていた。神罰を思わないように。

源氏はまた去年の野の宮の別れがこのころであつたと思ひ出して、自分の恋を妨げるものは、神たちであるとも思つた。むずかしい事情が間にあればあるほど情熱のたかまる癖をみずから知らないのである。それを望んだのであつたら加茂の女王との結婚は困難なことでもなかつたのであるが、当時は暢のんき氣にしていゐて、今さら後悔の涙を無限に流しているのである。齋院も普通の多情で書かれる手紙でないものを、これまでどれだけ受けておいでになるかしれないのであつて、源氏をよく理解したお心から手紙の返事もたまにはお書きになるのである。

る。厳正にいえば、神聖な職を持っておいでになって、少し謹慎が足りないともいうべきことであるが。

天台の經典六十巻を読んで、意味の難解な所を僧たちに聞いたりな  
どして源氏が寺にとどまっているのを、僧たちの善行によってぶつりき仏力で  
この人が寺へつかわされたもののように思つて、法師の名誉である  
と、下級の輩までも喜んでいた。静かな寺の朝夕に人生を觀じては歸  
ることがどんなにいやなことほだしに思われたかしのであるが、紫の  
女王一人が捨てがたいほだし絆ずきようになつて、長く滞留せずに歸ろうとする源氏  
は、その前に盛んな誦經を行なつた。あるだけの法師はむろん、その  
辺の下層民にも物を多く施した。歸つて行く時には、寺の前の広場の  
そこここにそうした人たちが集まつて、涙を流しながら見送つてい

た。りようあん 諒闇中の黒い車に乗った喪服姿の源氏は平生よりもすぐれて見えるわけもないが、美貌びぼうに心の惹ひかれぬ人もなかった。

夫人は幾日かのうちに一段ときれいになったように思われた。高雅に落ち着いている中に、源氏の愛を不安がる様子の見えるのが可憐かれんであつた。幾人かの人を思う幾つかの煩悶はんもんは外へ出て、この人の目にくほどのことがあつたのであろう、「色変はる」というような歌を詠よんできたのではないかと哀れに思つて、源氏は常よりも強い愛を夫人に感じた。山から折つて歸つた紅葉もみぢは庭のに比べるとすぐれて紅あかくきれいであつたから、それを、長く何とも手紙を書かないでいることによつて、また堪えがたい寂しさも感じている源氏は、ただ何でもない贈り物として、御所においでになる中宮ちゆうぐうの所へ持たせてやった。手紙

は命婦<sup>みようぶ</sup>へ書いたのであった。

珍しく御所へおはいりになりましたことを伺いまして、両宮様いづれへも御無沙汰<sup>ごぶさた</sup>しておりますので、その際にも上がって見たかったのですが、しばらく宗教的な勉強をしようとその前から思い立っていました、日どりなどを決めていたものですから失礼いたしました。紅葉<sup>もみじ</sup>は私一人で見えていましては、錦を暗い所へ置いておく気がしてなりませんから持たせてあげます。よろしい機会に宮様のお目にかけてください。

と言うのである。実際珍しいほどにきれいな紅葉であつたから、中宮も喜んで見ておいでになつたが、その枝に小さく結んだ手紙が一つついていた。女房たちがそれを見つけ出した時、宮はお顔の色も変

わって、まだあの心を捨てていない、同情心の深いりっぱな人格を持ちながら、こうしたことを突発的にする矛盾があの人にある、女房たちも不審を起すに違いないと反感をお覚えになつて、瓶かめに挿ささせて、庇ひさしの間の柱の所へ出しておしまいになつた。

ただのこと、東宮の御上についてのことなどには信頼あそばされることを、丁寧に感情を隠して告げておよこしになる中宮を、どこまでも理智りちだけをお見せになると源氏は恨んでいた。東宮のお世話はことごとく源氏がしていて、それを今度に限つて冷淡なふうにしてみせては人が怪しがるであろうと思つて、源氏は中宮が御所をお出になる日に行つた。まず帝みかどのほうへ伺つたのである。帝はちようどお閑暇ひまで、源氏を相手に昔の話、今の話をいろいろとあそばされた。帝の御容貌

は院によく似ておいでになって、それへ艶えんな分子がいくぶん加わった、なつかしみと柔らかさに満ちた方でましますのである。帝も源氏と同じように、源氏によつて院のことを思い出しになった。ないしのかみ尚侍との関係がまだ絶えていないことも帝のお耳にはいつていたし、御自身でお気づきになることもないのであるが、それもしかたがない、今はじめて成り立った間柄ではなく、自分の知るよりも早く源氏のほうがその人の情人であつたのであるからと思召おぼしめして、恋愛をするのに最もふさわしい二人であるから、やむをえないともお心の中で許しておいでになって、源氏をとがめようなどとは、少しも思召さないのである。詩文のことで源氏に質問をあそばしたり、また風流な歌の話をおもしろくしたりするうちに、齋宮の下向の式の日のこと、美しい人

だったことなども帝は話題にあそばした。源氏も打ち解けた心持ちになつて、野の宮の曙あけぼのの別れの身にしんだことなども皆お話しした。二は十日っかの月がようやく照り出して、夜の趣がおもしろくなつてきたころ、帝は、

「音楽が聞いてみたいような晩だ」と仰せられた。

「私は今晚中宮が退出されるそうですから御訪問に行つてまいります。院の御遺言を承つていまして、だれもほかにお世話をする人もない方でございますから、親切にしてさしあげております。東宮と私どもとの関係からお捨てしておけませんのです」

と源氏は奏上した。



「院は東宮を自分の子と思つて愛するようにと仰せなすったからね、自分はどの兄弟よりも大事に思っているが、目に立つようにしてもと思つて、自分で控え目にしている。東宮はもう字などもりつぱなふうにお書きになる。すべてのことが平凡な自分の不名誉をあの方が回復してくれるだろうと頼みにしている」

「それはいろんなことを大人のようになさいますが、まだ何と申しても御幼齡ですから」

源氏は東宮の御勉強などのことについて奏上をしたのちに退出して行く時皇太后の兄である藤大納言の息子むすこの頭とうの弁べんという、得意の絶頂にいる若い男は、妹にようこの女御にようごのいる麗景殿れいげいでんに行く途中で源氏を見かけて、「白虹日はくこうを貫けり、太子懼おぢたり」と漢書の太子丹が刺客しんのうを秦王

に放った時、その天象を見て不成功を恐れたという章句をあてつけにゆるやかに口ずさんだ。源氏はきまり悪く思ったがとがめる必要もなくそのまま素知らぬふうで行ってしまったのであった。

「ただ今まで御前におりまして、こちらへ上がりますことが深更になりました」

と源氏は中宮に挨拶あいさつをした。明るい月夜になった御所の庭を中宮はながめておいでになって、院が御位みくらいにおいでになったころ、こうした夜分などには音楽の遊びをおさせになって自分をお喜ばせになったことなどと昔の思い出がお心に浮かんで、ここが同じ御所の中であるようににも思召しがたかった。

九重<sup>このへ</sup>に霧や隔つる雲の上の月をはるかに思ひやるかな

これを命婦<sup>みよつぐみ</sup>から源氏へお伝えさせになった。宮のお召し物の動く音などもほのかではあるが聞こえてくると、源氏は恨めしさも忘れてま  
ず涙が落ちた。

「月影は見し世の秋に変はらねど隔つる霧のつらくもあるかな

霞<sup>かすみ</sup>が花を隔てる作用にも人の心が現われるとか昔の歌にもあったよ  
うでございます」

などと源氏は言った。中宮は悲しいお別れの時に、将来のことをい

ろいろ東宮へ教えて行こうとあそばすのであるが、深くもお心には  
いっていないらしいのを哀れに思いになった。平生は早くお寝やすみに  
なるのであるが、宮のお帰りあそばすまで起きていようと思召すらし  
い。御自身を残して母宮の行っておしまいになることがお恨めしいよ  
うであるが、さすがに無理に引き止めようともあそばさないのが御親  
心には哀れであるに違いなかった。

源氏は頭の弁の言葉を思うと人知れぬ昔の秘密も恐ろしくて、尚侍  
にも久しく手紙を書かないでいた。時雨しぐれが降りはじめたころ、どう  
思ったか尚侍のほうから、

木枯こがらしの吹くにつけつつ待ちし間まにおぼつかなさの頃ころも経にけり

こんな歌を送ってきた。ちようど物の身にしむおりからであつたし、どんなに人目を避けてこの手紙が書かれたかを想像しても恋人の情がうれしく思われたし、返事をするために使いを待たせて、唐紙からかみのはいつた置き棚だなの戸をあけて紙を選び出したり、筆を気にしたりして源氏が書いている返事はただ事であるとは女房たちの目にも見えなかつた。相手はだれくらいだろうと肱ひじや目で語っていた。

どんなに苦しい心を申し上げてもお返事がないので、そのかいのないのに私の心はすっかりめいり込んでいたのです。

あひ見ずて忍ぶる頃の涙をもなべての秋のしぐれとや見る

心が通うものでしたなら、通つても来るものでしたなら、空も寂しい色とばかりは見えないでしょう。

などと情熱のある文字が列つらねられた。こんなふうにな女のほうから源氏を誘い出そうとする手紙はほかからも来るが、情のある返事を書くにとどまつて、深くは源氏の心にしまないものらしかった。

中宮は院の御一周忌をお営みになったのに続いてまたあとに法華經ほけきょうの八講を催されるはずでいろいろと準備をしておいでになった。十一月の初めの御命日に雪がひどく降った。源氏から中宮へ歌が送られた。

別れにしけふ今日は来れども見し人に行き逢あふほどをいつと頼まん

中宮のためにもお悲しい日で、すぐにお返事があつた。

ながらふるほどは憂<sup>う</sup>けれど行きめぐり今日はその世に逢<sup>こ</sup>ふ心地<sup>ち</sup>して

巧みに書こうともしない字が雅趣に富んだ気高<sup>けだか</sup>いものに見えるのも源氏の思いなしであろう。特色のある派手<sup>はで</sup>な字というのではないが決して平凡ではないのである。今日だけは恋も忘れて終日御父の院のために雪の中で仏勤めをして源氏は暮らしたのである。

十二月の十幾日に中宮の御八講があつた。非常に崇<sup>すう</sup>厳<sup>ごん</sup>な仏事であつた。五日の間どの日にも仏前へ新たにささげられる経は、宝玉の軸に

うすもの

羅の絹の表紙の物ばかりで、外包みの装飾などもきわめて精巧なものであった。日常の品にも美しい好みをお忘れにならない方であるから、まして御仏みほとけのためにあそばされたことが人目を驚かすほどの物であつたことはもつともなことである。仏像の装飾、花机はなづくえの被おほいなどの華美さに極楽世界もたやすく想像することができた。初めの日は中宮の父帝の御菩提ぼだいのため、次の日は母后のため、三日目は院の御菩提のためであつて、これは法華經の第五卷の講義のある日であつたから、高官たちも現在の宮廷派の人々に斟酌しんしゃくをしていず数多く列席した。今日の講師にはことに尊い僧が選ばれていて「法華經はいかにして得し薪たきぎこり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」という歌の唱えられるころからは特に感動させられることが多かつた。仏前に親王方もさまざまの捧ささげ



物を持っておいでになったが、源氏の姿が最も優美に見えた。筆者はいつも同じ言葉を繰り返しているようであるが、見るたびに美しさが新しく感ぜられる人なのであるからしかたがないのである。最終の日には中宮御自身が御仏に結合を誓わせられるための供養になっていて、御自身の御出家のことがこの儀式の場で仏前へ報告されて、だれもだれも意外の感に打たれた。ひょうぶぎよう兵部卿の宮のお心も、源氏の大將の心もあわてた。驚きの度をどの言葉が言い現わしえようとも思えない。宮は式の半ばで席をお立ちになってれんちゆう簾中へおはいりになった。中宮は堅い御決心を兄宮へお告げになって、えいざん叡山の座主をお招きになって、授戒のことを仰せられた。おじ伯父君にあたる横川よかわの僧都そうずが帳中に参ってお髪くしをお切りする時に人々の啼泣ていきゅうの声が宮をうずめた。平凡な老人でさえ

いよいよ出家するのを見ては悲しいものである。まして何の予告もあそばさずにたちまちに脱履の実行をなされたのであるから、兵部卿の宮も非常にお悲しみになった。参列していた人々も同情の禁ぜられない中宮のお立場と、この寂しい結末の場を拝して泣く者が多かつた。

院の皇子方は、父帝がどれほど御愛寵あいちようなされたお后きさきであつたかを、現

状のお気の毒さに比べて考えては皆暗然としておいでになった。方々かたがた

は慰問の御挨拶あいさつをなされたのであるが、源氏は最後に残つて、驚きと

悲しみに言葉も心も失つた氣もしたが、人目が考えられ、やっと氣を引き立てるようになしてお居間へ行つた。落ち着かれずに人々がうろろしたことや、すすり泣きの声もひとまずやんで、女房は涙をふきながらあなたこなたにかたまっていた。明るい月が空にあつて、雪の光

と照り合っている庭をながめても、院の御在世中のことが目に浮かんできて堪えがたい気のするのを源氏はおさえて、

「何が御動機になりました、こんなに突然な御出家をあそばしたのですか」

と挨拶を取り次いでもらった。

「これはただ今考えついたことではなかったのですが、去年の悲しみがありました時、すぐにそういたしましては人騒がせにもなりますし、それでまた私自身も取り乱しなどしてはと思ひまして」

例の命婦<sup>みよづみ</sup>がお言葉を伝えたのである。源氏は御簾<sup>みす</sup>の中<sup>きぬず</sup>のあらゆる様子<sup>きぬず</sup>を想像して悲しんだ。おおぜいの女の衣摺<sup>きぬず</sup>れなどから、身もだえしながら悲しみをおさえているのがわかるのであった。風がはげしく吹

いて、御簾の中の薰香くんこうの落ち着いた黒方香くろほうこうの煙も仏前の名香のにおいもほのかに洩もれてくるのである。源氏の衣服の香もそれに混じって極樂が思われる夜であつた。東宮のお使いも来た。お別れの前に東宮のお言いになった言葉などが宮のお心にまた新しくよみがえってくることによつて、冷静であらうとあそばすお気持ちも乱れて、お返事の御挨拶を完全にお与えにならないので、源氏がお言葉を補つた。だれもだれも常識を失つていゝといつてもよいほど悲しみに心を乱しているおりからであるから、不用意に秘密のうかがわれる恐れのある言葉などは発せられないと源氏は思つた。

「月のすむ雲井をかけてしたふともこのよの闇やみになほや惑はん

私にはそう思えますが、御出家のおできになったお心持ちには敬服  
いたされます」

とだけ言つて、お居間に女房たちも多い様子であつたから源氏は捨てられた男の悲痛な心持ちを簡単な言葉にして告げることもできなかった。

「大方おほかたの憂うきにつけては厭いとへどもいつかこの世を背そむきはつべき

りつばな信仰を持つようにはいつなれますやら」

宮の御挨拶は東宮へのお返事を兼ねたお心らしかつた。悲しみに堪えないで源氏は退出した。

二条の院へ帰っても西の対へは行かずに、自身の居間のほうに一人臥<sup>ぶ</sup>しをしたが眠りうるわけもない。ますます人生が悲しく思われて自身も僧になろうという心の起こってくるのを、そうしては東宮がおかわいそうであると思い返しもした。せめて母宮だけを最高の地位に置いておけばと院は思召したのであったが、その地位も好意を持たぬ者の苦しい圧迫のためにお捨てになることになった。尼におなりになつては后<sup>きさき</sup>としての御待遇をお受けになることもおできにならないであらうし、その上自分までが東宮のお力になれぬことになつてはならないと源氏は思うのである。夜通しこのことを考え抜いて最後に源氏は中宮のために尼僧用のお調度、お衣服を作つてさしあげる善行をしなければならぬと思つて、年内にすべての物を調えたいと急いだ。王命婦<sup>おうみょうぶ</sup>

もお供をして尼になったのである。この人へも源氏は尼用の品々を贈った。こんな場合にりっぱな詩歌しいかができてよいわけであるから、宮の女房の歌などが当時の詳しい記事とともに見いだせないのを筆者は残念に思う。

源氏が三条の宮邸を御訪問することも気楽にできるようになり、宮のほうでも御自身でお話をあそばすこともあるようになった。少年の日から思い続けた源氏の恋は御出家によって解消されはしなかったが、これ以上に御接近することは源氏として、今日考えるべきことではなかったのである。

春になった。御所では内宴とか、踏歌とうかとか続いてはなやかなことばかりが行なわれていたが中宮は人生の悲哀ばかりを感じておいでに

なつて、後世ごせのための仏勤めに励んでおいでになると、頼もしい力もおのずから授けられつつある気もあそばされたし、源氏の情火のがから脱れえられたことにもお悦びよろこがあつた。お居間に隣つた念誦ねんずの室のほか、新しく建築された御堂みどうが西の対の前を少し離れた所にあつてそこではまた尼僧らしい嚴重な勤めをあそばされた。源氏が伺候した。正月であつても来訪者は稀まれで、お付き役人の幾人だけが寂しい恰好かつこうをして、力のないふうに事務を取つていた。白馬あおうまの節会せちえであつたから、これだけはこの宮へも引かれて来て、女房たちが見物したのである。高官が幾人とはなく伺候していたようなことはもう過去の事実になつて、それらの人々は宮邸を素通りして、向かい側の現太政大臣邸へ集まつて行くのも、当然といえは当然であるが、寂しさに似た感じを宮もお



覚えになつた。そんな所へ千人の高官にあたるような姿で源氏がわざわざ参賀に来たのを御覧になつた時は、わけもなく宮は落涙をあそばした。源氏もなんとなく身にしむふうにあたりをながめていて、しばらくの間はものが言えなかつた。純然たる尼君のお住居すまいになつて、御簾すの縁ふちの色も几帳きちようも鈍色にびであつた。そんな物の間から見えるのも女房たちの淡鈍色うすにびの服、黄色したな下襲がさねの袖口そでぐちなどであつたが、かえつて艶えんに上品に見えないこともなかつた。解けてきた池の薄氷にも、芽をだしそめた柳にも自然の春だけが見えて、いろいろに源氏の心をいたましくした。「音に聞く松が浦島うらしま今日ぞ見るうべ心ある海人あまは住みけり」という古歌を口ずさんでいる源氏の様子が美しかつた。

ながめかる海人の住処すみかと見るからにまづしほたるる松が浦島

と源氏は言った。今はお座敷の大部分を仏に譲つておいでになつて、お居間は端のほうへ変えられたお住居すまいであつたから、宮の御座と源氏自身の座の近さが覚えられて、

ありし世の名残りなごだになき浦島に立ちよる波のめづらしきかな

と取り次ぎの女房へお教えになるお声もほのかに聞こえるのであつた。源氏の涙がほろほろとこぼれた。今では人生を悟りきつた尼になつてゐる女房たちにこれを見られるのが恥ずかしくて、長くはいず

に源氏は退出した。

「ますますごりっぱにお見えになる。あらゆる幸福を御自分のものにしていらっしやったところは、ただ天下の第一の人であるだけで、それだけではまだ人生がおわかりにならなかったわけで、ごりっぱでもおきれいでも、正しい意味では欠けていらっしやるところがあつたのです。御幸福ばかりでなくおなりになって、深味がおできになりましたね。しかしお気の毒なことですよ」

などと老いた女房が泣きながらほめていた。中宮もお心にいろいろな場合の過去の源氏の面影を思っておいでになった。

春期の官吏の除目じもくの際にも、この宮付きになっている人たちは当然得ねばならぬ官も得られず、宮に付与されてある権利で推薦あそばさ

れた人々の位階の陞叙もそのままに捨て置かれて、不幸を悲しむ人が多かった。尼におなりになったことで後の御位は消滅して、それとにも給封もなくなるべきであると法文を解釈して、その口実をつけて政府の御待遇が変わってきた。宮は予期しておいでになったことで、何の執着もそれに対して持つておいでにならなかったが、お付きの役人たちにたより所を失った悲しいふうの見える時などはお心にいささかの動揺をお感じにならないこともなかった。しかも自分は犠牲になつても東宮の御即位に支障を起こさないように祈るべきであると、宮はどんな時にもお考えになつては専心に仏勤めをあそばされた。お心の中に人知れぬ恐怖と不安があつて、御自身の信仰によつて、その罪の東宮に及ばないことを期しておいでになった。そうしてみずから

慰められておいでになったのである。源氏もこの宮のお心持ちを知っていて、ごもつともであると感じていた。一方では家司<sup>けいし</sup>として源氏に属している官吏も除目<sup>じもく</sup>の結果を見れば不幸であつた。不面目な気がして源氏は家にばかり引きこもっていた。左大臣も公人として、また個人として幸福の去つてしまった今日を悲観して致仕の表を奉つた。帝は院が非常に御信用あそばして、国家の柱石は彼であると御遺言あそばしたことを思召<sup>おぼしめ</sup>すと、辞表を御採用になることができなくて、たびたびお返しになったが、大臣のほうではまた何度も繰り返して、辞意を奏上して、そしてそのまま出仕をしないのであつたから、太政大臣一族だけが栄えに栄えていた。国家の重鎮である大臣が引きこもってしまったので、帝も心細く思召されるし、世間の人たちも歎<sup>なげ</sup>いてい

た。左大臣家の公子たちもりっぱな若い官吏で、皆順当に官位も上りつつあったが、もうその時代は過ぎ去ってしまった。三位中將<sup>さんみ</sup>などともこうした世の中に気をめいらせていた。太政大臣の四女の所へ途絶えがちに通いは通っているが、誠意のない婿であるということに反感を持たれていて、思い知れというように今度の除目にはこの人も現官のまままで置かれた。この人はそんなことは眼中に置いていなかった。源氏の君さえも不遇の歎<sup>なげ</sup>きがある時代であるのだから、まして自分などはこう取り扱われるべきであるとあきらめていて、始終源氏の所へ来て、学問も遊び事もいっしょにしていた。青年時代の二人の間に強い競争心のあったことを思い出して、今でも遊び事の時などに、一方のすることをそれ以上に出ようとして一方が力を入れるというようなこ

とがままあつた。春秋の読経どきようの会以外にもいろいろと宗教に關した会を開いたり、現代にいられないでいる博士はかせや学者を集めて詩を作ったり、韻いんふたぎをしたりして、官吏の職務を閑却した生活をこの二人がしているという点で、これを問題にしようとしている人もあるようである。

夏の雨がいつやむともなく降ってだれもつれづれを感じるころである、三位中将はいろいろな詩集を持って二条の院へ遊びに來た。源氏も自家の図書室の中の、平生使わない棚たなの本の中から珍しい詩集を選えり出して來て、詩人たちを目だつようにはせずに、しかもおおぜい呼んで左右に人を分けて、よい賭物かけものを出して韻ふたぎに勝負をつけようとした。隠した韻字をあてはめていくうちに、むずかしい字がたくさ

ん出てきて、経験の多い博士なども困った顔をする場合に、時々源氏が注意を与えることがよくあてはまるのである。非常な博識であった。

「どうしてこんなに何もかもがおできになるのだろう。やはり前生の因に特別なもののある方に違いない」

などと学者たちがほめていた。とうとう右のほうが負けになった。

それから二日ほどして三位中將が負けぶるまいをした。たいそうにはしないで雅趣のある檜破子弁当ひわりごが出て、勝ち方に出す賭物かけものも多く持参したのである。今日も文士が多く招待されていて皆席上で詩を作った。階前の薔薇ばらの花が少し咲きかけた初夏の庭のながめには濃厚な春秋の色彩以上のものがあつた。自然な気分の多い楽しい会であつた。



中將の子で今年から御所の侍童に出る八、九歳の少年でおもしろく笙<sup>しょう</sup>の笛を吹いたりする子を源氏はかわいがっていた。これは四の君が生んだ次男である。よい背景を持っていて世間から大事に扱われている子であつた。才があつて顔も美しいのである。主客が酔いを催したころにこの子が「高砂」<sup>たかさご</sup>を歌い出した。非常に愛らしい。（「高砂の尾<sup>お</sup>上に立てる白玉椿<sup>しらたまつばき</sup>、それもがと、ましもがと、今朝咲いたる初花に逢<sup>あ</sup>はましものを云々<sup>うんぬん</sup>」という歌詞である）源氏は服を一枚脱いで与えた。平生よりも打ち解けたふうの源氏はことさらにまた美しいのであつた。着ている直衣<sup>のうし</sup>も単衣<sup>ひとえ</sup>も薄物であつたから、きれいな肌<sup>はだ</sup>の色が透いて見えた。老いた博士たちは遠くからながめて源氏の美に涙を流していた。「逢はましものを小百合葉<sup>さゆりば</sup>の」という高砂の歌の終わりの

ところになって、中将は杯を源氏に勧めた。

それもがと今朝けさ開けたる初花に劣らぬ君がにほひをぞ見る

と乾杯の辞を述べた。源氏は微笑をしながら杯を取った。

「時ならで今朝咲く花は夏の雨に萎しをれにけらし匂にほふほどなく

すっかり衰えてしまったのに」

あとはもう酔ってしまったふうをして源氏が飲もうとしない酒を中将は許すまいとしてしていた。席上でできた詩歌の数は多かった

が、こんな時のまじめでない態度の作をたくさん列ねておくことのむだであることを貫之も警告しているのであるからここには書かないでおく。歌も詩も源氏の君を讃美したものが多かった。源氏自身もよい気持ちになって、「文王の子武王の弟」と史記の周公伝の一節を口にした。その文章の続きは成王の伯父おじというのであるが、これは源氏が明瞭に言えないはずである。兵部卿の宮も始終二条の院へおいでになつて、音楽に興味を持つ方であつたから、よくいっしょにそんな遊びをされるのであつた。

その時分に尚侍ないしのかみが御所から自邸へ退出した。前から瘡病わらわみにかかつていたので、禁厭まじないなどの宮中でできない療法も実家で試みようとしてであつた。修法しゅほうなどもさせて尚侍の病の全快したことで家族は皆喜んで

いた。こんなころである、得がたい機会であると恋人たちはしめし合  
わせて、無理な方法を講じて毎夜源氏は逢いに行つた。若い盛りのほ  
なやかな容貌ようぼうを持つた人の病で少し瘦やせたあとの顔は非常に美しいも  
のであつた。皇太后も同じ邸やしきに住んでおいでになるころであつたから  
恐ろしいことなのであるが、こんなことのあればあるほどその恋がお  
もしろくなる源氏は忍んで行く夜を多く重ねることになつたのであ  
る。こんなにまでなつては氣がつく人もあつたであろうが、太后に訴  
えようとはだれもしなかつた。大臣もむろん知らなかつた。

雨がにわかには大雨になつて、雷鳴が急にはげしく起こつてきたあ  
る夜明けに、公子たちや太后付きの役人などが騒いであなたこなたと  
走り歩きもするし、そのほか平生この時間に出ていない人もその辺に

出ている様子がうかがわれたし、また女房たちも恐ろしがって帳台の近くへ寄って来ているし、源氏は帰って行くにも行かれぬことになって、どうすればよいかと惑った。秘密に携わっている二人ほどの女房が困りきっていた。雷鳴がやんで、雨が少し小降りになったところに、大臣が出て来て、最初に太后の御殿のほうへ見舞いに行つたのを、ちょうどまた雨がさつと音を立てて降り出していたので、源氏も尚侍も気がつかなかった。

大臣は軽輩がするように突然座敷の御簾みすを上げて顔を出した。

「どうだね、とてもこわい晩だったから、こちらのことを心配していたが出て来られなかった。中將や宮の亮すけは来ていたかね」

などという様子が、早口で大臣らしい落ち着きも何もない。源氏は

発見されたくないということに気をつかいながらも、この大臣を左大臣に比べて思ってみるとおかしくてならなかった。せめて座敷の中へはいつてからものを言えばよかったのである。尚侍は困りながらいざり出て来たが、顔の赤くなっているのを大臣はまだ病気がまったく快くはなっていないのかと見た。熱があるのであらうと心配したのである。

「なぜあなたはこんな顔色をしているのだろう。しつこい物怪だからね。修法をもう少しさせておけばよかった」

こう言っている時に、淡お納戸色の男の帯が尚侍の着物にまといついてきているのを大臣は見つけた。不思議なことであると思つていと、また男の懷中紙にむだ書きのしてあるものが几帳の前に散らかつ

ているのも目にとまった。なんという恐ろしいことが起こっているの  
だろうと大臣は驚いた。

「それはだれが書いたものですか、変なものじゃないか。ください。  
だれの字であるかを私は調べる」

と言われて振り返った尚侍は自身もそれを見つけた。もう紛らわす  
術すべはないのである。返事のできることもないのである。

尚侍が失心したようになっていたのであるから、大臣ほどの貴人で  
あれば、娘が恥に堪えぬ気がするであろうという上品な遠慮がなけれ  
ばならないのであるが、そんな思いやりもなく、気短な、落ち着きの  
ない大臣は、自身で紙を手で拾った時に几帳すきの隙から、なよなよとし  
た姿で、罪を犯している者らしく隠れようとせず、のんびりと横に

なっている男も見た。大臣に見られてはじめて顔を夜着の中に隠して紛らわすようにした。大臣は驚愕きょうがくした。無礼ぶれいだと思った。くやしくてならないが、さすがにその場で面と向かって怒りを投げつけることはできなかったのである。目もくらむような気がして歌の書かれた紙を持って寝殿へ行ってしまった。尚侍は気が遠くなっていこうで、死ぬほどに心配した。源氏も恋人がかわいそうで、不良な行為によって、ついに恐るべき糾弾きゆうだんを受ける運命がまわって来たと悲しみながらもその心持ちを隠して尚侍をいろいろに言って慰めた。

大臣は思っていることを残らず外へ出してしまわねば我慢のできないような性質である上に老いの僻ひがみも添って、ある点は斟酌しんしやくして言わないほうがよいなどという遠慮もなしに雄弁に、源氏と尚侍の不都合



を太后に訴えるのであった。まず目撃した事実を述べた。

「この畳紙の字は右大将の字です。以前にも彼女は大将の誘惑にかかつて情人関係が結ばれていたのですが、人物に敬意を表して私は不服も言わずに結婚もさせようと言っていたのです。その時にはいっとうに気がないふうを見せられて、私は残念でならなかったのですが、これも因縁であろうと我慢して、寛容な陛下はまた私への情誼じょうぎで過去の罪はお許しくださるであろうとお願いして、最初の目的どおりに宮中へ入れましても、あの関係がありましたために公然と女御にょごにはしていただけないことで、私は始終寂しく思っているのです。それにまたこんな罪を犯すではありませんか、私は悲しくてなりません。男は皆そうであるというものの大将もけしからん方です。神聖な齋院

に恋文を送っておられるというようなことを言う者もありましたが、私は信じることはできませんでした。そんなことをすれば世の中全体が神罰をこうむるとともに、自分自身もそのままではいられないことはわかっていられるだろうと思いますし、学問知識で天下をなびかしておいでになる方はまさかと思つて疑いませんでした」

聞いておいでになつた太後の源氏をお憎みになることは大臣の比ではなかつたから、非常なお腹だちがお顔の色に現われてきた。

「陛下は陛下であつても昔から皆に輕蔑けいべつされていらつしやる。致仕の大臣も大事がつていた娘を、兄君で、また太子でおありになる方にお上げしようとはしなかつた。その娘は弟で、貧弱な源氏で、しかも年のゆかない人に婚めあわせるために取つておいたのです。またあの人も東宮

の後宮こうきゆうに決まっていた人ではありませんか。それだのに誘惑してしまつてそれをその時両親だつてだれだつて悪いことだと言つた人がありますか。皆大將をひいきにして、結婚をさせたがつておいでになつた。不本意なふうで陛下にお上げなすつたじゃありませんか。私は妹をかわいそうだと思つて、ほかの女御にようごたちに引けを取らせまい、後宮の第一の名誉を取らせてやろう、そうすれば薄情な人への復讐ふくしゅうができるのだと、こんな気で私は骨を折っていたのですが、好きな人の言うとおりになっているほうがあの人にはよいと見える。齋院を誘惑しようとかかっていることなどはむろんあるべきことですよ。何事によらず当代を誑のろつてかかる人なのです。それは東宮の御代みよが一日も早く来るようにと願っている人としては当然のことでしょう」

きつい調子で、だれのこともぐんぐん悪くお言いになるのを、聞いていて大臣は、ののしられている者のほうがかわいそうになった。なぜお話したろうと後悔した。

「でもこのことは当分秘密にしていたきましよう。陛下にも申し上げないでください。どんなことがあつても許してくださいさるだろうと、あれは陛下の御愛情に甘えているだけだと思う。私がいましめてやつて、それでもあれが聞きません時は私が責任を負います」

などと大臣は最初の意気込みに似ない弱々しい申し出をしたが、もう太后の御機嫌きげんは直りもせず、源氏に対する憎悪どうおの減じることにもなかつた。皇太后である自分もいっしょに住んでいる邸内に来て不謹慎きわまることをするのも、自分をいっそう侮辱して見せたい心なので

あろうとお思いになると、残念だというお心持ちがつのるばかりで、これを動機にして源氏の排斥を企てようともお思いになった。

### 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---